

レッシングの戯曲と宗教的啓蒙精神の研究

序 説

友 田 孝 興

「レッシングの戯曲と宗教的啓蒙精神の研究」と題して、友田（研究代表）と吉田と芦津は、18世紀ドイツ啓蒙主義文学の代表的存在であり、その後の近代ドイツ文学の動向を大きく決定づけたレッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781）を取り上げ、その代表戯曲『賢者ナータン』を共通の研究基盤に据えながら、彼の啓蒙主義的精神の本質を、宗教と哲学、言語と格言詩、演劇とヨーロッパ、という複数の方向から、総合的に把握しようと試みた。つまり友田は、ドイツ文学史上のみならず、ドイツ精神史上にも偉大な足跡をしるしたこのレッシングにおける宗教思想の展開を辿りながら、『賢者ナータン』に見られる偏見からの人間解放の思想や普遍的な「人間性の理想」を、吉田は、ルターに始まりローガウへと続く近世の口承言語の研究を通して、『賢者ナータン』における言語使用の特色を、芦津は、悲劇『エミーリア・ガロッチィ』（森鷗外はこれを『折薔薇』と題して翻訳）のイギリスでの受容を通して、レッシングの戯曲の問題点とその特色を明らかにすることに努め、それぞれの課題別考察の成果をもとに、総合的なレッシング像の把握を目指して本研究を推進した。

そもそもレッシングにおける偏見からの人間解放の思想や普遍的な「人間性の理想」は、彼の初期の作品『ユダヤ人たち』において既に提起されている。その思想や理想を宗教との関連の中で展開したのが『賢者ナータン』である。彼は、ユダヤ人問題に真理への鋭い目を向け、同年配の親友であるユダヤ人哲学者モーゼス・メンデルスゾーンの高邁な人間性をこの作品の主人公ナータン（ユダヤ人の豪商であるが、人々より賢者と称される）に取り入れながら、キリスト教社会のユダヤ人に対する非理性的排他性を批判する。ナータンがキリスト教徒の若きテンプル騎士に対して、「私たちは友達にならねばなりません。……キリスト教徒やユダヤ教徒は、人間であるより前にキリスト教徒やユダヤ教徒なのでしょうか。ああ、私は人間と呼ばれることに満足しているもう一人をあな

たに見いだすことができたなら」というこの言葉の中に、偏狭な宗派意識を超えた人間解放の一端を垣間見ることができる。

レッシングはこの作品において、自己の宗教観を見事に表現する。キリスト教とユダヤ教とイスラム教のうち「真の宗教は一つしかあり得ない」、どれが「真の宗教」か、というサラディン（十字軍よりイェルサレムを奪回した12世紀の史実のスルタンが作中人物として登場）の意地悪い問いに対し、ナータンは、三つの指輪の比喩（ボッカチオの『デカメロン』に取材）をもって、それに応える。比喩の概略は次のとおりである。遙か昔のこと、計り知れない価値と、神からも人からも愛されるという秘密の力をもったオパールの指輪があって、代々その家の最愛の息子がそれを相続し家長となる。ある代になって、三人の息子を分け隔てなく等しく愛していた父親は、死期が近づいたとき、誰にその指輪を譲るべきものかと困惑する。そこで彼は本物と寸分違わぬ指輪を二つ作らせ、それを三人の息子に分け与える。父親の死後、三人の間で真贋をめぐっての争いが起こり裁判に持ち込まれる。そこで賢明な裁判官は、どれが本物の指輪であるか証明できない以上、自分の指輪こそが本物であると堅く信じ、優しさと協調と善行と神への帰依をもって、神からも人からも愛されるという本物の指輪に具わる秘められた力を発揮さすべく努め励むがよい、と諭すのである。確かに本物の指輪は一つしかあり得ないが、本物が本物としての力を発揮するためには、その真なることを「堅く信じる」ことと愛の実践行とが不可欠となる。そしてこの主体の信と行をもってすれば、真ならざるものも真と等しいものとなることが暗示される。かくしてこの三つの指輪と同様に、三つの歴史的宗教においても、どれが「真の宗教」であるかは証明され得ないし、証明しようとしても無意味である。しかしそうだからといって宗教の否定が語られているのではない。ナータンの口を借りてレッシングが我々に訴えかけているもの、それは「真の宗教は一つしかあり得ない」ということなのである。それは三つの歴史的宗教のうちの一つが「真の宗教」であるという意味ではなく、その三者を超えたところに感得される、文字通りの「真の宗教」に立つことが人間性の理想として求められているのである。そしてこの一つでしかあり得ない「真の宗教」によって、人間も一つになることが暗示される。『賢者ナータン』は、三つの指輪の比喩を実に巧みに用いながら、三つの宗教が、普遍的人間性と宗教的寛容の精神に立ち、信仰上の違いを超えて偏見と憎悪を克服し、相互の融和へと至る

ことの大切さを説くのであるが、キリスト教の正統派を自認する、政治的支配権力と結びついた聖職者たちの非寛容的な宗教批判が勢いを増す18世紀に、このような作品が生まれたことは注目に値する。

カントの「啓蒙とは、自らその責めを負うべき未成年性から人間が脱却することである。未成年性とは、他人の指導なしには自己の悟性を使用できない状態である。…自己の悟性を使う勇気をもて！というのが啓蒙の標語である」という言葉にもあるように、レッシングにとっては、宗教的権威に対しても、政治的支配権力に対しても、それらが有する抑圧・欺瞞・排他性に対しては、勇気を以て批判することが彼の人間愛の原点であった。人間の価値は、その人間が所有している、あるいは所有していると思込んでいる真理にあるのではなく、真理究明に費やした誠実な努力にあるのであって、所有は人間を無為怠惰にし、傲慢にする、というのが彼の一貫した精神的態度である。「人間は行為するために創造された」のであって、言葉を弄ぶために創造されたのではない。

「我々は認識においては天使であり、生活においては悪魔である」というのが常であるが、これを克服するために、彼は、聖書の一字一句を無批判的に真なるものとして受け容れるところの、行為実践を伴わない正統派の信仰を批判する。つまり彼にとっては、正信は正行を伴わない限り何の意味ももたない。正統派にとっては、造物主としての神は被造物としての世界を超越した存在であるが、レッシングにとっては、スピノザのいうように、「神はあらゆるものの内在的原因であって超越的原因ではない」。彼は神と世界との対立から離れ、神から与えられた理性によって神（真理）の声を聞こうとする。この開かれた「信仰的理性」こそが彼の理性の特質なのである。神を否定する自己閉塞的理性は彼のものではない。なぜなら純粋な真理は神のみのものであり、その神の真理を求めて努力精進しようとするところに、人間の完全性への成長があるからである。彼は『賢者ナータン』において、当時の宗派宗教のもつ形骸化した独善性を批判すると共に、「真の宗教」とは何かを、理性と信仰の本質に立って模索する。三つの歴史的宗教のうちのいずれが「真の宗教」であるかは理性によっては証明され得ない。そうであるならば、「信仰的理性」に導かれつつ、隣人愛の実践行を通してその真なることを自ら証しすることが不可欠となる。レッシングはこの作品において、そのような偏見からの人間解放の思想と普遍的な「人間性の理想」を追求するのである。

彼にとっては、この「人間性の理想」を求める精神的風土は、学識ある敬虔なルター派の牧師の家庭に生まれたことによって、すでに幼少期より用意されていた。しかし彼は、父の願いに従ってライプチヒ大学の神学部で学ぶも、やがてその勉学意欲を喪失し、宗教的真理の固定観念から離れられない神学者・聖職者としてではなく、自由な作家として「人間性の理想」を追い求め始める。その第一歩が「よりよきキリスト教徒」とは何か、という自己自身に対する問いであった。聖書の言葉や教理や習慣を、あたかも財産を相続するかのよう、有難く相続することがよきキリスト教徒なのであろうか。あのマタイ伝やルカ伝に記されている「汝の敵を愛せよ」という言葉の心を行わずことなくしてキリスト教徒と自称することが許されるのか。二十歳のときのこの信行不離への熱き思いが、若きレッシングをして、生きた真理の探求へと、「人間性の理想」の希求へと駆り立てたのである。『賢者ナータン』はまさにそのような彼の生活と精神の総合であった。作品の第四幕第七場におけるナータンの秘められた過去の告白によると、彼は妻と七人の息子を、ユダヤ人なるがゆえにキリスト教徒によって焼き殺されている。三日三晩というもの、灰燼のなかで泣き崩れ、憤怒と狂乱のなかで神を非難し、キリスト教徒への執拗な憎悪を誓うのであった。そんな状況下にある彼のところへ、生まれて間もないキリスト教の洗礼を受けた女の子が連れてこられ、養育を依頼される(この嬰兒がナータンの養女レツヒャ。彼女の父は、後に明かされるのであるが、キリスト教徒のドイツ女性と結婚したサラディンの弟であり、戦場へ赴くに際し嬰兒をナータンに託す。彼にはもう一人レツヒャの兄にあたる男の子がいて、それがテンプル騎士。この若き騎士がサラディンに殺されなかったのは弟にそっくりであったがため)。やがてナータンは理性を取り戻し、恩讐を超えて、「それでも神はまします」、「それが神のご意志であるなら」と嬰兒を受け取り、「亡くした七人の子供のうち一人がもどってきた！」と神に感謝する。理性によって憎悪の連鎖を断ち切り、しかも神の声を聞き取って、その神意を自己の実行へと促す、このナータンの「信仰的理性」こそは、啓蒙主義期における一般的な合理性とは一線を画する、レッシングに特有の理性理解の反映なのである。真摯な真理探究と、神意に裏打ちされた人間理性への覚醒と「汝の敵を愛せよ」という愛の実行、ここに我々は彼の宗教的啓蒙精神の目指す「人間性の理想」を如実に見ることができる。もともとこの作品は、いわゆる「断片論争」(H. S. ライマールスが弾圧を恐れて出版しなかった遺稿を、レッシ

ングがヴォルフエンビュッテルの図書館長時代にその意義を認め、『理神論者の容認について：無名氏の断片』と題して公刊したことに起因する。ルター派の正統主義を自認するハンブルクのカタリーナ教会の主席牧師であった J. M. ゲッツェがこれをキリスト教に対する冒瀆として、非難の矛先をレッシングに向ける。そして二人の間に激しい神学論争が起こる。しかし最終的には、国家権力によって、レッシングは論争の中止を命ぜられ、神学論の検閲なき出版特権を剥奪されることになる)の終結を余儀なくされたレッシングが、それに代わる自己の信念の表現として出版した戯曲である。従ってこの作品においては、彼の人類愛に満ちた生きた真理探求への努力と、そして一つしかない、しかも人々を一つにする「真の宗教」を求めての高邁な精神とが、種々の登場人物の言行を通して結晶しているのみならず、人間存在の意味を神に尋ねる彼の「信仰的理性」の光が、形骸化した閉ざされた人間精神を照破すべく、無倦の活動を今に続けている、と言わねばならない。

友田が中心的に行った以上のような考察(「レッシングの『賢者ナータン』の研究」は大谷大学研究年報第59集に掲載予定)に基づいて、吉田孝夫の「近世ドイツの口頭伝承とレッシング—『ローガウ寓意詩集』から『賢者ナータン』へ—」、芦津かおりの「英国における『エミーリア・ガロッティ』の受容について—その英国初演をめぐって—」という各論考は執筆された。18世紀ドイツ文学、あるいは近代ドイツ文学そのものが、キリスト教的精神とその言語表現からの深甚な影響下に発展したことは周知のとおりである。こうしたドイツ文学のいわば《抹香臭さ》は、例えば、早くより強大な唯一の世俗的権力としての中央集権的な国家が成立し、成熟した宮廷社会を生み出した、そしてその条件下に、統一的な国民的言語がいち早く形成された隣国フランスとは実に異質である。N・エリアスが活写したように、フランス宮廷社会内での複雑な人間関係は、世俗的な領域での巧みな言語的陶冶を実現した。他者を分析し、他者に働きかけるこのような言語は、やがてフランスの百花繚乱たる心理小説を生み出す源ともなる。それに対してドイツは、ついに国家的統一を果たすことはなく、小国が乱立するなかで、せいぜいの文化的紐帯として機能したのがキリスト教教会、とりわけルターに始まるドイツ的キリスト教の精神と言語であった。ルターの聖書翻訳とそれが与えた影響の大きさはつとに有名である。

レッシングは、まさにこのルター派教会の牧師の息子として生まれ、そのキリスト教精神のふところに育ったのであるが、しかし重要なのは、近代ドイツ

文学の黎明を告げるレッシングが、決してルター正統派のプロテスタンティズムへの隷属者ではなく、むしろ正反対に、その最も先鋭なる批判者であったということ、そしてさらには、18世紀ドイツという一定の時代と地域を越えた、国際的かつ領域横断的な視野を備えていたということである。古典古代へ、イギリス、フランスへ、あるいは自国ドイツの過去へ、あるいはユダヤ・イスラム世界へと、広い目配りを行うなかで、レッシングは、18世紀という彼の時代のドイツの道筋を、試行錯誤をくりかえしつつ思い描いてゆく。これは、ドイツ・ルター派と異質な要素としてあったものではなく、まさにルター派のなかにこそ孕まれた文化的開放性でもあったことが銘記されるべきであろう。

近代ドイツ文学に如実に現われた、いわゆる宗教的精神と表現性、とりわけレッシングにおける宗教的啓蒙精神は、しかし単に宗教的というのではない、少なくともこのような広い文脈のもとに捉えるべき開かれた人間性の問題であり、その全体像を、ここでは近世ドイツ、そして18世紀イギリスと古典古代の観点から出発して、わずかながらも照射しようと試みたのであった。18世紀という時代そのものと、レッシングという人物自体が、研究の学際性を要求した。後にトーマス・マンが批判する、ドイツ・プロテスタンティズムが招来したというドイツの政治的保守性と未成熟を視野に置きながら、むしろここでは、ドイツ・プロテスタンティズムがかつてもっていたはずの豊かな文化的可能性を、その成功と失敗とをあわせて、炙りだすこと、それを巨視的な目的として掲げ、議論を重ねた次第である。宗教的精神からのドイツ文化の誕生、しかしこれはまた、別なる形での研究・分析の枠組を必要とする、興味深い課題ではあるであろう。